一　次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

店の前におかみさん風の人が、二、三人立っていました。コペル君は、なんといって店へはいっていったらいいのかわからないので、しばらくそのうしろに立っていました。

（中略）

「お次は、揚げ二枚。へい」

おかみさんは、また元気な声で言って、新聞紙にはさんだ油揚を差し出し、若い女の人から銅貨を受け取りましたが、そのときコペル君の姿に目をとめたのでしょう、銅貨をザラザラと売り溜めの中に入れながら、いきなり声をかけました。

「そこの坊ちゃんは、なんの御用？」

元気な声を ① 不意に浴びせかけられて、コペル君はドギマギしました。

「あの……。あの、浦川君いませんか。」

おかみさんは、おやおやというア カオつきでコペル君を見おろし、それからわかったというイ ヨウスで、大きく二、三度うなずきました。

「ああ、うちの留のお友達ですね。そうですか。あたしゃ、また、どっかお使いのお子かと思った。ええ、ええ、おりますとも。」

そういって店のウ オクの方をふりかえり、大きな声でいいました。

「留や。お友だちがいらしったよ。」

店のオクのエ 薄暗がりの中で、誰かがオ セナカをこちらに向けたまま仕事をしていましたが、おかみさんの声を聞くと、びっくりしてこちらを向きました。それが、浦川君でした。

「ああ、本田君か。」

浦川君はそういいながら出て来ましたが、その浦川君の姿を見ると、② コペル君はあっけに取られました。なんぼエプロンの多い町とはいえ、どうしたことでしょう、浦川君までエプロンを掛けているじゃあありませんか。エプロンの下からは、おなじみのだぶだぶなズボンがのぞいて、足には板草履をはいています。長い竹箸をもって立っている浦川君を眺めながら、コペル君は思わず眼を丸くしていいました。

「君、病気じゃなかったの？」

「……」

浦川君は、③ もじもじして、なんとも返事しません。おかみさんが代って答えました。

「はい、これが病気というわけじゃございませんけど、店の若い者がかぜにやられましてね。おやじさんは留守ですし、手が足りませんもんで、これにも学校を休んでもらっておりますんですよ。何しろいそがしいもんですから、学校の方の届けも、ついそのままにしてあって……。でも、よくいらしってくださいました。まあ、まあ、おはいんなさいまし。」

コペル君と浦川君とは、店のオクにはいって、上り框（がまち）に腰をかけました。おかみさんは、大きな真鍮（しんちゅう）の火鉢を、よいしょと懸声（かけごえ）をしてコペル君のそばに寄せ、お茶をいれて

出しました。しかし、おかみさんは、そこにゆっくりしているわけにゆきませんでした。また、お客が来たからです。

浦川君と並んで腰をかけたものの、コペル君は、何を話しだしていいのかわかりません。それで、④フーフーお茶を吹きながら飲んでいました。浦川君も、もじもじしていましたが、やがて、いいにくそうに、

「君、ちょっと待っててね。揚げるのが残ってるから―」

と、いって立ちあがりました。

店の隅に、大きな釜があって、鉄鍋に油がたぎっています。

「すぐだよ。これだけ揚げちまうだけだから―」

そういって浦川君は、竹箸でそばの台を指さしました。そこには、お豆腐を薄く切ったのが、四、五枚のせてありました。それを、こわさないように、そっと鍋の中に落としこみ、揚がったところを竹箸でつまみ出すのでした。コペル君は、油揚というものが、お豆腐を揚げたものだということを、この時はじめて知りました。

「いまのうち揚げとかないと、夕方、売りにゆくのに間にあわないんさ。」

⑤浦川君は、鍋の中をみつめたまま、そういいました。それから、馴れた手つきで鍋の中の油揚を片づけてゆきました。よく揚がったやつを、長い竹箸の先につまみあげ、ちょいと振って油を切ってから、そばの金網の上へポイとほうりあげます。そして、次のが揚がるのを待っている間に、金網の上にたまったやつを、箸の先でチョイ、チョイ、チョイと横向きに重ねてゆき、ときどき長い箸の腹でポンポンとたたきます。すると出来あがった油揚が、行儀よく揃って順々に並んでゆくのでした。

⑥「へえ！」

と、コペル君はおなかの中で感歎の声をあげました。運動事は何をさせてもカラッ下手な、あの浦川君が、長い箸をこんなに器用に使おうとは、今の今まで知りませんでした。油鍋の前に投手が、プレートに立ったときのような、場馴れた落ち着きさえ見えるではありませんか。

⑦「へえ！」

と、コペル君は、とうとう口に出して感歎しました。

「うまいねえ、君！」

浦川君は、⑧きまりの悪そうな、でも少し得意なような、一種特別な笑いガオをしました。

「君、どのくらい練習したの？」

と、コペル君がたずねました。

「練習？」

「ああ、だって、とてもうまいもの。」

「練習なんかしないよ。ただ、おっかさんの手伝いを、ときどきしてただけさ。でも、君、一つやりそこなうと、三銭損しちゃうだろう。だから、自然一生懸命やるようになるんさ……」

残っていた四、五枚を揚げてしまうと、浦川君は、

「おっかさん、出来たよ。」

と、声をかけました。

「そうかい。御苦労、御苦労。」
おかみさんは、大きな体のくせに、ちょこちょこと小走りでやって来て、ぬれた布巾で鍋をつかまえ、どっこいしょと火からおろしました。たいへんな力だなあ—と、コペル君はまた感心しました。浦川君はエプロンをぬぎ、そばにあった新聞紙で手をふきました。コペル君の前には、やっと、⑨学校で見馴れた浦川君があらわれました。

『君たちはどう生きるか』吉野源三郎

問一　太線部ア～オの漢字は読みがなをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「不意に」について、

1　これと同じ意味の言葉を文章中から四文字で抜き出しなさい。

2　そのように声をかけられたコペル君の心情を、筆者はどのような表現技法を用いて描きましたか。次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　擬音語
イ　擬態語
ウ　擬人法
エ　擬声語

問三　傍線部②「コペル君はあっけに取られました」とありますが、なぜあっけにとられたのでしょうか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　コペル君もエプロンを掛けていたから。
イ　浦川君がエプロンを掛けていなかったから。
ウ　おかあさんが浦川君にエプロンを掛けてあげていたから。
エ　浦川君がエプロンを掛けていたから。

問四　傍線部③「もじもじして、なんとも返事しません」とありますが、なぜ返事をしなかったのでしょうか。文章中の言葉を使って四十字程度で説明しなさい。

問五　傍線部④「フーフーお茶を吹きながら飲んでいました」とありますが、なぜコペル君はこのような動作をしたのでしょうか。その説明としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　お茶があまりにも熱かったため。
イ　コペル君が猫舌だったため。
ウ　何を話せばよいのかわからなかったため。
エ　浦川君にお茶がおいしいことを伝えるため。

問六　傍線部⑤「浦川君は、鍋の中をみつめたまま」について、浦川君はどのようにして油揚を作っていますか。（　　）に入る言葉を文章中から抜き出しなさい。

（　A　三文字　）を薄く切り、（　B　五文字　）ように、そっと鍋の中に落としこみ、揚がったところを竹箸でつまみ出す。

問七　傍線部⑥「へえ！」、傍線部⑦「へえ！」について、この時のコペル君の心情の説明をするため、文章中の言葉を使って、次の文章中の空欄の言葉を埋めなさい。

・初めは（　A　五文字　）で感歎の声をあげたが、馴れた手つきで油揚を作る浦川君に、とうとう（　B　四文字　）て感歎してしまった。

問八　傍線部⑧「きまりの悪そうな」とありますが、どんな意味ですか。その意味として、もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　格好が悪そうな
イ　何となく不満そうな
ウ　何となく恥ずかしそうな
エ　格好が良さそうな

問九　傍線部⑨「学校で見馴れた浦川君があらわれました」とありますが、いつもは浦川君はどのような姿をしていますか。その姿を、文章中の言葉を用い、三十文字以内で答えなさい。

二　次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

「両親は子どもを教育するとき、げんかくにしつけをするのがいい。」という考え方もありますし、反対に「子どもはできるだけのんびりと自由に教育する方がいい。」と言う人もいます。「人間は生まれながらにして自由だ。」と言う人もあり、「人間には自由なんてない。不自由ばかりだ。」と言う人もいるでしょう。

このようなばあいには、どちらの方が正しくて、どちらの方がまちがっている、ということは、これだけでは、① すぐにはっきりときめることができません。いままでの例のような、うたがいのない、だれでもがみとめる答ができあがっていないのです。

こうなると、だれもが ア カッテに自分の好きなことを言いだします。かってに、それこそでたらめに イ 運河を掘りはじめます。

「おとななんて、みんなうそつきだ。だから私たちだっておとなの言うことなんかきく ウ ヒツヨウはないさ。」と、② 反抗的なティーンエージャーは言うでしょう。「人生なんてつまらない。はやく死んだほうがいい。」と、こっそりつぶやく子もいるでしょう。もう少しませたような気になっている子は「学問なんて、じっさいの世の中ではなんの役

にも立っていないじゃないか。学問をいっしょうけんめいにやるなんて、ばかだよ。」

このようなことばは「何をっ！　こんちきしょう！」とか「ああ、つまんない。」とか「おめえたち、おばかさんだよ。」というようなことばとだいたい同じで、感情的ではあっても、あまり エ チテキとは言えませんし、正しい理くつに合った考え方ではありません。それはちょうど、③ 坂の下から坂の上へ水を流そうとする運河を掘っているのと同じです。

人はだれでも感情的なものとチテキなものとを区別しないで、ごちゃごちゃにものを考えるものです。いまの子どもたちのことばも、ただ一時的な感情を表したさけび声だと思っていればいいのですが、つい、いつのまにかそれを言った本人も、何か、ある正しいことを知っているのだ、という気になります。そして、それらが④ 正しい考えだと本気に思って、いろいろなことをやりだすと、あとでとんでもない不幸な目にあったりします。

私は若い人たちの生き生きとしたそして オ 純真な気持が、途中でしぼんだり、つみとられたりしないで、りっぱな実になってもらいたいと思っています。

私自身、若いころには、やはりずいぶんめちゃくちゃな理くつをほんとうだと思って苦しみました。できることならば、あなたたちに、よけいな苦しみや、まわりみちなどをさせないで、できるだけ遠くまで歩いていってもらいたいと思います。

（中略）

そのために私は、はっきりとわかっている⑤ 正しい考え方のすじみち、言いかえれば、できあがっている、大きな、だれにもわかる⑥ 運河がどうなっているかを、まず、あなたたちに知ってもらいたいのです。

みんながよく考えることの、どこが正しいすじみちに合っているのか、どこがすじみちからはずれているかを、いろいろな例をあげて説明しているうちに、きっとあなたたちは、この論理という運河のだいたいの見とおしをもつようになるでしょう。

つぎに、できあがった、目に見える大きな論理の運河の見通しがついたあとで、まだはっきりとした運河ができていないようなばあいのことを考えてみたいと思います。私たちの毎日の考え方の中には、このようなばあいがあんがい多いのです。

もちろん、まだはっきりとした運河ができていないのですから、このようなところでは、これがぜったいに正しい考え方だ、というようなものを、あなたたちに見せるわけにはいかないでしょう。

しかし私自身は、論理の運河を新しく掘るための技術的な知識を、あなたたちよりはもっています。水道をひくときには、やはり水道の専門技師に来てもらわないと、水がうまく流れないことがあるように、私も、いろいろなものの考え方の中の、どこがはっきりしないか、どこの水の流れが悪いかを発見することになれています。

どうか、いちおう私の技術に従ってみてください。そのうちにあなたたちの中から、さらにすぐれた論理の運河の技師が出て、私のつけた運河より、もっとりっぱな運河を建設することができたなら、この本をあなたたちに読んでもらったかいが、じゅうぶんにあったことになるのです。

『考え方の論理』沢田允茂

問一　太線部ア～オの漢字は読みがなをひらがなで答え、カタカナは漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「すぐにはっきりときめることができません」とありますが、なぜですか。文章中の言葉を用いて、三十五字以内で説明しなさい。

問三　傍線部②「反抗的なティーンエージャー」とあるが、どのような意味ですか。次の選択肢の中からふさわしいものを選びなさい。

ア　言うことを聞く若者
イ　反抗的な大人
ウ　従順ではない若者
エ　話をよく聞く若者

問四　傍線部③「坂の下から坂の上へ水を流そうとする運河を掘っている」とありますが、これはどのような行動を言い表した表現ですか。文章中の言葉を用い、二十字以内で書きなさい。

問五　傍線部④「正しい考え」について、本文中から、反対の意味で使われている言葉を以下の空欄にあてはまるように七文字で抜き出しなさい。

（　　七文字　　）考え

問六　傍線部⑤「正しい考え方のすじみち」について、このことを具体的に示している言葉を、二文字で抜き出しなさい。

問七　傍線部⑥「運河がどうなっているか」とあるが、どのようにすればわかりますか。次の選択肢の中からふさわしくないものを選びなさい。

ア　我田引水
イ　七転八倒
ウ　試行錯誤
エ　悪戦苦闘

問八　筆者は、どのようにすれば正しいすじみちを見つけることができると言っていますか。次の選択肢の中から最もふさわしい選択肢を選びなさい。

ア　自分のはっきりしない所や、どの部分が悪いかを発見することになれた人々の意見を聞くことで、できるだけ正しい考え方を身につけることができる。
イ　相手のはっきりしない所や、悪い部分を発見することになれた我々が意見をして教えていくことで、正しい考え方を相手に身につけさせることができる。
ウ　自分の考え方に自信を持ち、相手の意見をあくまでも聞かないで悪い部分を見つけることによって、自立をして正しい考え方を身につけることができる。
エ　自分がはっきりしている所や、どの部分が正しいかを相手にほめてもらうことで自信を持ち、より自分の磨き上げた考え方を身につけることができる。